

桜蔭俳話会 十月句会 (第三六九回)

平成三十年十月二十七日(土)

大塚・歳勝土遺跡(横浜市都筑区) 吟行。
句会場は横浜市歴史博物館研修室。

【推薦句】

風通る席を分けあひはしりそば 邦子

塩害をのがれし紅葉日にまぶし ヤエ子

弥生人の言葉は知らず虫鳴けり 明美

穴惑弥生の民の好奇心 かほる

眠り継ぐ遺跡の靍や夕日影 明美

【原句】遺跡の丘へ街の息吹や竹の春 友子

【理由】遺跡と対置するものを絞る。盛り込み過ぎである。

【添削案】縄文の遺跡の丘や竹の春

【原句】秋霖や靍の香強し住居跡 ヤエ子

【理由】靍は夏の季語。使いたいけれども使用は差し控える。

【添削案】秋霖や匂ひ残りし住居跡

【原句】古墳跡空の高さよ赤トンボ 邦子

【理由】空の高さだけでは平凡か。

【添削案】古墳には古墳の高さ赤とんぼ

【原句】骨組の太き住居址天高し ヤエ子

【理由】城址の址であるから、住居址∥じゅうきよしと読ませたいのは分かるが、少し無理がある。住まひでも良いのではないか。

【添削案】骨組の太き住まひや天高し

【原句】野ざらしの大八車芋の露 友子

【理由】野ざらしは、芭蕉の野ざらし紀行を連想させる。見た通りの壁に立て掛けてあるというので良いのではないか。野に置いてあるから、露がかかっているのでは、理屈っぽい。

【添削案】立て掛けし大八車芋の露

【原句】四車線真直ぐ伸びる罽雲 ヤエ子

【理由】語数が上手く処理出来なければ、語順を入れ替えてみる。

【添削案】罽雲まつすぐ伸びる四車線

【原句】ひび割れの木臼にくぬぎの実三個 友子

【理由】語数が上手く処理出来なければ、語順を入れ替えてみる。

【添削案】ひび割れの木臼に三個くぬぎの実

【原句】雨上がり空に向いて竹の春 邦子

【理由】空に向くだけでは簡単過ぎる。

【添削案】雨上がり輝く空へ竹の春

【原句】古民家の板戸の木目柿熟るる 友子

【理由】板戸と柿の位置関係。

【添削案】古民家の板戸の木目柿簾

【原句】ムラ長の竪穴住居秋気澄む 邦子

【理由】片仮名表記は外来語。そうでなければ、出来るだけ漢字表記か平仮名表記にする。

【添削案】むらおさの竪穴住居秋気澄む

【原句】秋気澄む文様美しき弥生土器 明美

【理由】季語と美しきが合い過ぎる。

【添削案】秋気澄む文様ひとつ弥生土器

【原句】秋の蚊の出入自由の竪穴居 友子

【理由】竪穴居は、意味の分かる表現にする。

【添削案】秋の蚊の出入り自由の住居跡

【原句】秋雲やムラ人の墓肅肅と かほる

【理由】片仮名表記は外来語。そうでなければ、出来るだけ漢字表記か平仮名表記にする。

【添削案】むらびとの墓の肅々秋の雲

【原句】新蕎麦や長き講釈聞きてから 友子

【理由】講釈の内容には特に触れない。

【添削案】添へられし講釈ひとつ走り蕎麦

【原句】古民家の鈴生りの柿ひかりをり ヤエ子

【理由】鈴生りだけでは、俳句にならない。ない1
【添削案】古民家の柿の鈴生り四車線。

【原句】茶室脇の小さき流れや草紅葉　友子
【理由】視覚と聴覚の俳句。

【添削案】茶室への小流れの音草紅葉
【原句】里芋の広がり受くる秋の雨　かほる
【理由】里芋は秋の季語。秋の雨を直す。

【添削案】里芋の葉の広がりや雨上がる

【原句】竹の春幹の向こうの青き空　ヤエ子

【理由】単なる向かうでは、簡単すぎる。

【添削案】竹の春幹の狭間の空青し

【原句】藁葺きの蓋のごとくや小鳥来る　かほる

【理由】ごとく俳句は弱いので極力さける。

【添削案】藁葺きの屋根隠したる小鳥かな

【原句】秋の蚊や払ひしも衣にとどまれり　ヤエ子

【理由】ころもの中に入り込んだ秋の蚊にした。

【添削案】秋蚊来る払ひても払ひても衣の内

【原句】貼られゆく土器のかけらの冷えまさり

明美

【理由】かけらを貼るの意味が解り難い。

【添削案】継ぎゆける土器のかけらや冷えまさり

【原句】命生む高床倉庫草の花　かほる

【理由】倉庫にした意味を出すために。

【添削案】命継ぐ高床倉庫草の花

【原句】赤とんぼ子孫残すや住居跡　かほる

【理由】語順を変えてみる。

【添削案】古墳群子孫残せし赤とんぼ

(文責 代表 増田守)

(不在投句 古野明美)